焔王光の巻

御遺文

炎王光

絶對理性によつて統一せらるゝ世界萬類　卽ち一切衆生は阿彌の根柢に出て佛性具有し　終局に歸趣すべき理性ありといへども　阿彌の理性と共にこの其性を陰覆する處の素質あり。之を脫却するに非ざれば阿彌の本質に歸趣すること能はず。其惡素質を脫却斷破する處の阿彌の性能を炎王光と名づく。

炎焔をもてすべての穢物を焚燒するが如く　また焔王光もて大闇黑を照破する勢用に喩へたるなり。初めに衆生必然的に陰覆する素質を明し　後に如何して之を脫却すべきの理由を說明せん。

障礙物に三種あり一煩惱障　二業障　三苦障之を惑業苦と云ふ。或は煩惱見思無明等の惑　業は善惡不動等の有漏の業　苦とは分段變易生死の苦。生死迷惑の理を論ずる時は　所謂本覺の理性が不覺の故に眞に迷ふて心動するが故に一念忽然念起する故

に　能見の心生じ之に對する境界顯現す。境は自心より起ることを知らず　天則を實理とし　自己に於て主我を執し　我執の幸福主義より惑ふて　違順の境に對して　貪と瞋とを生じ　爲に善惡の業を造り　業に依て苦樂の報を受く。こゝに於て　六道業繫の苦を受く。是を略して云はゞ　惑によりて業を造り　業によりて苦報を受くるなり。然るにこの三障を脫却の時には　初に苦を感じ　苦の元因は惡業にして　惡業は惑の衝動なりと知り　而して之を脫却すべきの必要を感すべし。故に初めに苦障卽苦毒の感情　人の天然性は幸福を求むるも甚だ得がたく　意志は滿足を望むも　是また滿足は得がたし。何故に滿足を得がたきやとならば　一は世界天則の性能は意志の希望に支吾をなすと　一には自己の機制の自然ならしむるによる。

三苦は所謂苦々　壞苦　行苦等。又生老病死　哀別離苦　五陰盛苦　求不得苦　怨憎會苦。要を云はゞ生死の苦なり。いかに幸運の人も　其實幸福主義には意志の滿足を得べき理なく　先に渴望したる目的に到達しぬれば　比較的に價値なく　悕望は遠く渴望を陽炎に求むるが如くにて畢竟して意志を足らしむるに非ず。能く觀じ來れば人は天然の幸福　目的の如くならば　誠に生くるの價値はなく　生活は鹿の陽炎を遠く渴望する如し　こゝに於て宗教の必要を感すべく炎王の妙用を仰ぐべし。之は苦毒をすつる意志より　人生苦惱多しとの觀念を本となす。苦毒の感情は解脫の要なり。若し苦毒の感ずるなくば　解脫の必要を知る動機なければなり。惡業に關して然り。

惡とは　道德秩序卽ち無上菩提阿彌の意に　背きたる邪智情操と行爲となり。吾人は前に絕對理性の個人にして　佛性具すと述べたり。理性阿彌の本質の中に於て　阿彌の目的無上道德に　協力して活動せざるべからざる理性を有するにも拘らず　絕對中なる個人は　絕對に反對する情操と行爲とは　斷然排除せざるべからざるを　却つて自ら保護する如き性質ある　之を惑といふ。

絕對無上道德の理性を顯はすと共に　之に抵抗するものを不道德卽ち罪惡とすれば　すべて之を脫却して　阿彌の理性に隨順して活動せざるべからず。之に障害するもの

は　飽迄排除せざるべからず。無限に進化發達すべき無上菩提の過程に障害物たる惡は　一處にては惡に非ずとも佗處にては　却て害となるあり。進化の階級にあつて曾ては菩提の大道に到るものも　却て今日には害と成るものあり。所謂昔小乘佛敎時代に自調自度の聲聞主義は　大我の利佗的救世的菩提主義の時にはたとへ疥癩野干たるも聲聞根性を發するなかれと云如し。阿彌の目的にかなはざるものは悉く惡なり。不道德として否定すべきもの　惡卽障害物なり。標準は變更すること有るべし。之に執するものは闇黑のみ惑のみ。

惡は無上菩提に反抗するも　或意味にては却て之にかなふあり。又惡は必要より出ると云ふも　譬ば寶珠を垢穢の鐵垢を除去して　却て寶珠の神聖を顯示するが如し。若し無上菩提にして　天然に顯示せば希有難遇の感なく神聖たること知らざらん。また天然に　阿彌に契合せば　阿彌に協力するの要なく　正義も無く　六弊も六度もあるなく　吾人の健鬪の勇氣もなし。之を障害する不德之に反抗する惡ありて初めて吾人は阿彌の目的に協力することの神聖にして　不正に對する正義の價値を顯はし　六度の貴重たる吾人の健鬪の勇を鼓舞して精神生活の必要を感ずべし。

惑とは　惡業卽罪惡は惑の衝動なり。無上菩提卽ち阿彌の終局目的に協力せざるべかるざる個人は　却て之に反抗せる如きの傾向あるは　卽ち全く絕對阿彌の個人たるを意識せず　單に個人的のみを眞の目的として　自己の本然の理性を悟らざるの故に自ら惑と云ふ。また罪惡は全く脫却の爲に有せる故に　脫却せざるべからず。而も自ら惑ふて　脫却すべきの理あるをしらず　脫却せざるべかざる罪惡を保存し　また罪惡の惡たるを知らざる如きは　皆惑なり。故に惑の衝動より三業を活動するものは悉く罪惡と成るなり。

罪惡とは　善惡の標準の一定せざるも　常恒に進化發達する　所謂　增進佛道の無上菩提を阻害するものを　罪惡なりとせば　この罪惡の衝動は　人の世には惡の誘惑物あり道德を害すべき所謂六賊充滿せる故　之に對して寫象する人の意志情操は　惡

の衝動ならざるべからず。即ち煩惱の種子なり。種子あるが故に現行して　菩提の爲に障害するを惡と名くべし。其の惡の現行を生ずるは　惡衝動即煩惱の種子と名く。煩惱に無明塵沙見思あり。今無明と見思とに就て說明せん。

無明は惑の根本なり。個人本是絕對理性の個人なるも個人は絕對との關係を悟らず理の歸趣處を識らず　自ら惑ふて個人を根底と立て主我を執す。主我は體慾我慾の根本として我を二種に分つ。我痴見愛慢等は知力と感情と意志との別なり。唯識には末那の屬性とす。我愛即ち主我幸福執意の一切　惡衝動の根本と名づくべし。唯識には俱生の惑と云ふ。即ち身體と俱に具する義なり。また天然性格に出たる義なり。俱生の惑は世に云はゞ　動物の原祖なり　動物生活の需要より出て　普徧的自家保存の機制理よりなれり。俱生の我執に屬する貪瞋痴慢の四屬性あり。何れも本能的機制故固有性にして　また固有性の我及び煩惱は自我保存の自然より出たるものにして　純朴にして　この間は善惡共に平均なり。次に分別起なる主我主義發展してよりは　本能に盲從せす　分別意識的に主我を主張し　此に屬する貪には　名利權勢榮利を貪り佗の幸福を自己に呑噉せんと欲し　主我に違ふ時は理の如何に拘らず瞋恚等を起し　正知を眩惑し　己れ德ありとし　傲慢にして憚る意なく　又忿恨　嫉妬　慳悋　憍舉傲慢　諂曲　害意等の屬性あり。また知力に屬する惑あり。所謂身見この五陰を即ち我なりと計度し　亦我は身體と共に滅して斷無に歸すと。或は我は一定して常に不變なりと。亦は因果の理なく善惡何れも我に關せすと。或は主我はこの機密に依て救靈せらると執し　すべて主我の幸福の爲に　眞理に非ざるも眞理なりと計度するが如きは悉く惑にあらずして何ぞや。

惡即ち煩惱に　種子あり現行あり。惡は他人の制裁に已むを得ずして　現行せざるも　主我種子あらん限りは惡の主我たるを失はず。種子は機緣あれば現行し　共現行せざるは慧巧にして　而も其情操に種子失はざる間は善といふに足らず。

幸福的種子は　生理機制の固有として存し　自我を保存し　之を要求するは　個人

意志の要性なり。相互の刺激より各個人の性を發達せしむる自然の理なきに非ず。

感覺的榮養生殖の慾の如きも　是快樂の爲にあらず正當なる目的の爲にあらば　また道德に反するに非ざるべし。

主我は俱生の人間普通の性なり。根本惡は本能に普徧の天性にして　夫よりは將來の變態は遺傳惡症にして　益〻菩提に反抗する惡力は開展して　所謂人間性格を逸脫して三惡の門を開くなり。

普徧的善惡平均を保つべき　世間的道德秩序に率ふは　佛敎の所謂る人間性格にして　三惡墮落熟識に非ず。病的の惡と成て主我欲望惡衝動發達して　固守にして治し難きに至れは所謂墮獄性格と名づく。墮落性惡即ち病的惡　普徧的主我よりは進んで惡衝動發達し　自ら牢固にして　理性に應ぜざるものは病的墮落性格なり。初感覺の欲も一定の快樂は進んで　習慣性をなし　習慣より益〻發達すれば終には惡弊症に至る。感性刺激精神的の惡刺激も　益〻發達すれば　精神惡弊症と成るに至る。或は遺傳襲來して終にて　大罪人を出す等　其他種々の原因より惡性病的を起すあり。

個人の惡質を開展せしむる緣は外境なり。誘惑斗りに非ず常に惡瘴氣の中に住み不知の間に感染すること多し。殊に病的宗敎の流行熱には　種々の精神的病狀を感染して　道德正氣の大弊害起す。之に感染する原因は天然の幸福主我の心に感じ易し。團體の罪過は現時代のみに非ず　この害毒を流したる泉源は　數時代の襲世的制度習慣が漸くに發達して　現代の罪過は遺傳罪過なり。此團體罪過は菩提の客觀界の道態の病狀にして大菩提の害甚し。團體的遺傳の惡は個人に感じて　天然の主我幸福なり個人はこの流行熱を免るゝ能はず。幸福主義の病的宗敎の病的準備なれるなり。

心工畫師の如く又一切唯心造。人自由意志あり。理性無明によりて主我を執す。善惡迷悟自己の意志に規定することを得。三惡四趣四聖悉く唯心の所變　故に道德的責任は自己にあつて免るゝ能はず。天台に所謂理に十界を具し　性惡を具し　心十界として造らざるなし。また異熟因の如くなりて　佛敎の業識とは　世に云ふ意志性格な

り。此意志の決定は皆欲望の結果なり。數習は性格をなし　佛敎は習慣性となす。たとへ窮親的習薰にあらざるも　遺傳的より襲ひ來るも　其元因は薰習力習慣より來るに外ならず。純粹元因理性には無定相にして　而も一切に系薰性を有し　系薰性のみならず　自己より因緣相待て活動すべき理性あり。性格は急に變更すること無し。性格と樂欲とは　欲望は一には性格により　一には時々の意志內容に依て規定せらる。意志內容は意志によりて存し　意志は任意の集中によつて意識寫象を起し　又一方には外部の刺激に依つて出でし寫象を糢糊し　又は壓迫する力を有す。意志寫象によりまた意志の決定に當れば　決定を變易することを得。若し人他の行動に利ある動機を生ぜしむべき寫象を意識の中に生ぜんの意志を有したるに他の方に行動せり人は意志決定の時後に　之を觀ずる時の間に變轉は隨ひ方に行ひ得せしを知らしむ。成るべく其時に任意を主張し　其決定に對して　潛伏せる意志を起すに足らざるは將來に於て能く任意を嚴にして增進すべく　潛伏せる意志を　活動せるに住意を用ゆれば　漸次に意志は任意を强め反應を盛にして　機會を失ふことを成す。

此自制の進步をなさしむる心理的裝置は　常住にして根本的潛伏せる意志方向ありて　其動機によりて寫象を生ずるも意志活動を出すを　此主我の目的は主我主觀目的と其衝動主我の用をなすは惡にして　客觀目的にして衝動道德秩序に順ふは善なり。

自制菩提の安心を決定して　根本に菩提の潛伏して　衆生の爲なることを能く知りて　彼に施爲するは菩提心なり。自己の精神に自律的に自らを制裁する意志を菩提心を鞏固にし阿彌に安立す。

常に定まりて　其內面阿彌の聖意の潛伏して　聖意實現すべき方面ありて　衆生の苦を見て　慈悲を起し彼の苦を救ひ　滿足を與ふべきの意志活動が決定せるは菩提心なり。

天然の幸福主我は　自律の精神を決して　純朴なる主我より修飾の主我に轉ずるも全く菩提心に非ざるよりは　惡は情操に存し　現行になるも惡性なり　自利的主我が

却て理性を支配する主我にして　理會省慮を方便としてながら　其目的舊の如し　畢竟全體自定は世間的奴隷たり。彼は全く主我の中なるを知らず　天然に離脫すべき理性を知らず　主我自利の基礎を立て　形式は自律的なるも　內實は天然に縛せられて眞正の擬似　眞の我は自制に依りて　天然動機を脫して　天然主我を脫す。

主觀自利は其まゝ利佗　卽ち客觀的理性目的に用ゆる者なり。菩提心は絕對阿彌を眞我の我　天然主我を棄て阿彌目的によりて自己卽ち阿彌の個體として　天然の我に屬せる煩惱を脫し　菩提の意志決定阿彌にありて　阿彌本來內外なきも內に安置せる聖意は客觀秩序に實現して努力するもの　之を菩提心と名づく。此菩提心缺けては宗敎實行に責任あるなし。天然の人には道德的責任をしらず。

菩提心は自制の煩惱を脫却する活動の機にして　人は常に內容には　自己の惡の健鬪に勇氣を奮ひ　所謂八萬四千の念々に　六賊の爲に侵害せられ八風の爲に動亂せらるゝも　眞我の城廓に　自制の自光の光を放ちて　城廓鞏固なれば　六賊も侵入する能はず　阿彌の中に碇泊すれば　八風もまた恐るゝに足らず。惡衝動の魔兵ほとはしり出ては　善衝動の與力を用ゐてふせぐべし。たとへ墮落病的の爲に侵すも何ぞ退治せざるべき。

菩提の妙用又能くこゝに於て用ふべし、若し惡なく不道德なくば　菩提また何の要かあらん　炎王光の要すべきなし。天性の惡も　六賊の誘惑墮落性も團體罪惡も　亦畏るゝに足らず。團體罪惡あれば利佗の菩提の必要を感ずべく　若は個人又は團體の罪惡の薪なくば炎王の火何をか燒かん。炎王は大火聚　觸るべからず觸るゝもの皆燒かれざるを得ず。

內面の惡衝動に對する六賊　突然として侵入する時は　善衝動を動機として衞守すべく　若し炎王光によつて　照破し已れば煩惱却て菩提の性なるを知らん。煩惱本是菩提衆生は惑ふて菩提を煩惱とす。然るに天然主我幸福の人は自ら惑ふて禍を發し害を成す。

天然主我の貪欲は是不道德なり　惡なり。然れども主我脫して　菩提心となり　上求菩提下化衆生の欲望となれば　貪欲は卽ち菩提なり。私の瞋恚に迷沒して　害を他に及ぼすが如きは甚だ罪惡なり。然れども菩提心の中に　正義たるも奮然として　自己の罪惡と奮戰する如きは　怒奮卽ち菩提なり。邪正を辨ぜず自己の惡を惡とせざるは愚痴なり。之を反展して邪智を去り　大賢は愚なるが如く　また無智自然智は釋迦の智。大賢は愚なるの如きは老子の智。鄕黨に在て言ふこと能はざるが如きは是孔子の愚。死罪宣告に辯語智を用ひざるはソクラテスの愚。愚痴に還て念佛するは然師の愚。孔子が之を知るは好むに如かず之を好むは之を樂しむに如かずと。感覺の快樂に換ふるに道を以て樂とせば快樂また菩提ならむ。

賢を賢として色にかへよ　愛また道に非ずや。何ぞ菩提の中に奮然として　正義の旗を立て罪惡の魔軍と健鬪すべき精神勢力を　天然の人は枉げて私に瞋恚の炎として自損々佗す惑に非ずして何ぞや。大我の個人として　神聖にして無上權威をもて　名利榮利すべての爲に撿束すべからざる本心を　主我の人は　却て枉げて傲慢として神聖を害す。賢を見ては齊しからんことを思ひ　進化發達の聖に昇る衝動たるを識らず天然の人は妬忌として誤用す　惑に非ずや。

煩惱の性　卽ち煩惱の本性を棄てゝ何處にか菩提の本性を求むべけん。諸佛は炎王光によつて　一切煩惱を照破して　衆生が　煩惱とし罪惡とする其の性を　卽ち菩提として　善の方面に向て應用す。衆生は愚暗にして　諸佛が無上大道に應用し活動する處の菩提を煩惱として　其衝動より業を起して罪惡を造る。

炎王光によつて　天然幸福主義と主我とを脫する時は　從來の煩惱は轉じて菩提となり　罪惡として作業せる所作は　善卽ち道德的行爲と轉ず。貪瞋痴慢疑悉く菩提を顯動せしめ活動する爲の必要より出たるも　天然の人は　之を誤用濫用して菩提の害を爲す。故に衆生にあつては惑と名づく。楞嚴に菩提卽ち煩惱なるを喩て　經に水も氷と成るか如し　氷還て水となれり　氷水は濕性是同じ　堅流相異れり。衆生は天然

規定によりて氷となり　聖者は炎王光によりて水となり　氷と成るも流潤の相と濕性とは失はざるが如し。惑業已に然り苦毒また。

衆生は絕對無爲の大涅槃の理性の中に依佗及び偏執の爲に生死し　天然の主我幸福主義には苦毒の感情甚だ多し。老病死憂怖は悉く苦に感ぜるが如し。

苦毒の感情も亦　解脫の要を感ずべき機會なく　すべての苦惱は解脫の要を感ぜしむるなり。若し病に痛苦の豫報なければ病の治療の要を知るによし無きが如し。若し苦毒の感情なくば　脫却の必要あるを知らず。故に是は是苦の解脫の豫報なること幸福主義は　この理性たるを識らず　主我の脫却すべきを識らず　却て苦の中に樂を求む。故に顚倒の謗を免れず。苦は解脫の豫報なることを知ると共に　趣越して觀じ來て見れば苦の性卽ち涅槃なり。

生死元是何物ぞ。自己の精神を離れて生死苦體あることなし。身體もと是精神の外に生死の體なし。然るに此生死の體たる精神は　天然主我を超越せば　卽ち絕對眞我の絕對　本自　不生不滅。本來不生。何の滅かあらん。

絕對眞心本然淸淨にして　主我を離るゝに於て　又此生滅の心卽ち不生滅の眞心たり。また氷の水となるが如し。若し此の苦を感する處の精神を捨て何の處にか不生滅の眞心を求むるか。若し此心を離れて外に涅槃あらば　何の自己に關する處あらん。絕對阿彌の炎王光によりて　天然の主我顚倒の夢覺め來て觀すれば　本來より大涅槃にして精神の體　其卽ち大涅槃。此罪惡の感情の天然主我の惑を除き去りて　覺來りて觀すれば卽ち菩提妙淨の體なり。

法身　苦　法身に迷ふが故に生死の苦を受く。生死の苦の體を證入する時は卽ち法身淸淨

般若　惑　衆生は如來の般若に迷ふが故に無明見思等の惑となる。惑の性を識る時は卽ち如來の智慧なり

解脫　業

本來無縛の中に於て　衆生は迷ふて善惡不動の有漏の業を起して三惡四趣を作る。

業も悟り入りて觀ずれば　卽ち解脫なり。衆生の業を離れて解脫の用なし。無明等の煩惱を離れて般若の象なし。生死苦の體を外にして　別に法身の體あるなし。天然の個人は主我を脫して　絕對阿彌の中に歸入すれば　惑業苦轉じて法身般若解脫と成り又生死卽涅槃　煩惱卽菩提。

昭和九年九月二十八日　印刷
昭和九年九月三十日　發行
（誌代年壹　圓）
編輯兼發行人　山崎辨成
小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番